

整形外科疾患、老年期患者のリハビリ意欲向上についての関わり
～キング「目標達成理論」を用いて～

キーワード：リハビリ 意欲 目標達成

中1階病棟 熊本 佳恵

はじめに

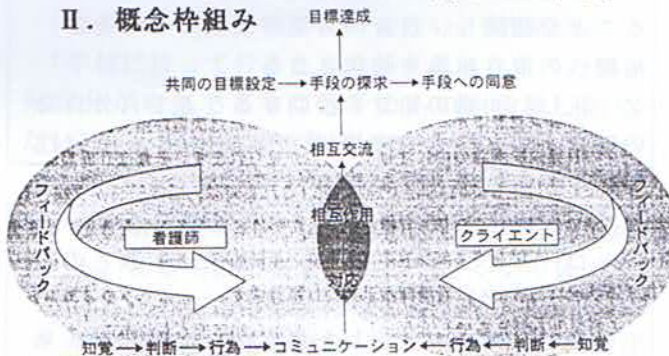
整形外科病棟において、リハビリ期にある患者と接すると、「なぜリハビリをしなくてはいけないのか、リハビリしたくない」といった訴えをよく耳にする。このような患者に対し、身体的苦痛の除去・軽減を試みても意欲の向上がみられない場合もある。そこで精神的介入（目標・動機づけ）が重要なのではないかと考えた。

今回術後のリハビリ期にある高齢患者を受け持ち、どのような看護介入（目標設定）が有効か、目標設定に重点を置いた「キング目標達成理論」を用い検討を行った為ここに報告する。

I. 目的

キングの目標達成理論の視点を用い、結果を分析することで①リハビリ継続においてどんな関わりが重要か②患者・看護師との認識のずれはどのように生じているか明らかにする。

II. 概念枠組み



III. 倫理的配慮

患者のプライバシー保護に努める。研究内容・目的を明確に示し、研究調査に協力するか否かが今後の治療に影響しないことを説明し、同意を得る。

IV. 研究方法

- i) 研究デザイン：事例研究
- ii) 研究期間：H18.6月～12月.
- iii) データの収集方法
 - ①目標設定面接場面のプロセスレコードを振り返り、目標設定の妥当性を考察する。
 - ②患者と評価を行い、目標達成がされたかどうか・その理由について振り返り、考察する。

V. 実施・結果

- i) 患者紹介
 - 名前：I氏 年齢：82歳
 - 診断名：右大腿骨頸部骨折 骨盤骨折

ii) 入院中の経過：

自宅の階段で転倒し、受傷した。入院後直後は骨盤骨折による出血性ショックの可能性があったため、CCUにて加療を行った。その後、整形外科病棟にて、骨折に対する治療が開始された。

今回の目標設定面接を行った時期は、ADL拡大を目指す時期であり、リハビリが必要であった。特にI氏のように骨盤骨折の併発など、長期臥床が予測される場合、今後の歩行についても視野に入れ、廃用症候群を防いでいくことも重要である。I氏は毎日ベッドサイドにてリハビリを受けることになったが、リハビリしているのはその間のみであり、後の時間はずっと臥床したまま過ごしていた。I氏はリハビリの必要性は理解しているようだったが、必ずしも積極的には見えなかった。

そこで、I氏と共に目標設定し実施を行った。（目標設定場面、その分析についてはプロセスレコード参照）

iii) 目標に対する実施と結果

目標と実施	結果（1週間後）
目標①：疼痛が軽減する （10段階評価で現在の6より数値が低くなる） I氏は腎疾患があるためNSAID系の鎮痛剤は禁忌であった。そのため医師に相談し、イドメシンプップの貼用という方法で様子を見るよう指示を受けた。I氏と相談し、リハビリの前、そしてI氏が疼痛を感じたとき適宜に使用していった。	目標①について 疼痛は、イドメシンプップを使用することで、疼痛の段階は10段階で4～5へ減ったというI氏の言葉が聴かれ、この期間の目標は達成された。しかし、イドメシンプップは掻痒感が生じたため長時間貼れず、持続的な軽減はできなかった。
目標②：1日3回のリハビリを行うことができる	目標②③について 疼痛が完全に消失しなかった事と、リハビリによって増強することへの不安から、1日3回のリハビリは行うことができなかった。また患肢の挙上も、上記の理由によりできなかった。
目標③：1人の力で右足の挙上ができる I氏の3回リハビリしたいという思いがあったため、疼痛増強のしない方法をPTに相談しながら決めた。等尺性運動、外転運動、挙上訓練をできる範囲で行うようにした。日中はPTと夫の助けを借り、それ以外の時間は食後落ち着いてからとし、自力での訓練を励行した。本人のできるペースでということを中心に置き進めていった。挙上訓練については本人がしづらいたとの話があったので、その分は等尺性運動に変更し行ってもらった。	よって目標②③は未達成である。 しかし、3回は行えなかったが、最低でも1日1回、できる日は1日2回のリハビリができたということであった。

VI. 考察

今回の事例では、目標達成に至ったものとそうでないものがあつた。

目標達成できたプランは、患者の知覚をNSが捉え、それが患者の考えている知覚と一致しているか確認している。(場面②)つまり、相互行為の中で正確な判断を導くためのフィードバックがなされている。よって正確な判断が生まれ、達成可能であり、適切な目標設定ができたのではないかと考える。

しかし、新たな問題として、IDPによる搔痒感が生じた。看護師はそのことを知覚しているが、それに対する目標設定を行っていない。これは、新しく情報が出た時点で、それを問題解決しようとする相互行為が行われなかった、つまり患者の知覚を正確に捉えられなかったということである。この背景には、目標①のプラン実施中のフィードバック不足が考えられる。

整形外科の術後リハビリ期にある患者は、心身日々変化していく。そのように変化していく過程をNSは正確に捉えて看護展開していく必要がある。I氏においては評価の設定を1週間としていたが、患者の変化、看護の効果をとらえフィードバックし、共同目標の軌道修正をしていくためには、もっと短期の目標評価を行うと、より効果的な介入になったのではないだろうか。

目標達成できなかったプランは②③である。I氏はリハビリで疼痛が生まれる恐怖や、医療者に遠慮している言動があつた。(場面③)疼痛に関しては、目標①で捉え介入しているが、遠慮していることに関しては、十分な知覚をしていない。「PTの先生に何回も来てもらうのは申し訳ない」という言葉があつたが、その言葉からは「遠慮はしているが、助けがあればリハビリできそう」ということが感じ取れる。しかしNSはその障害に気づくことができなかつた。それは、患者の入院前の背景や正確を捉えること＝個人システムの把握ができなかつたからであろう。

個人システムは個人間システム(相互浸透作用)に直接影響を及ぼす。そのため、どれだけ患者という人間の個人システムを認識し理解しようとするかによって、相互浸透作用は変わってくるのである。また、患者サイドにおいても同様のことが言える。「来てもらうのに申し訳ない」と感じているということは、遠慮だけでなく、医療者のことを「忙しい存在」「お願いしづらい存在」と捉えているのではないだろうか。I氏のこの言葉一つで、様々なI氏の知覚を読み取ることができたのに、目標設定場面では生かされていない。これもフィードバックを行い、I氏がなぜそのように感じているのか確認する必要があると思われる。

キングの、人間の相互行為のプロセスの中には、必ずフィードバックが存在している。コミュニケーションを通してフィードバックすることで、お互いの存在、行った行為、看護の効果について知覚し、お互いの知覚が一致していたのか確認することができる。もし、このフィードバックを行わなかつたら、どちらも一方通行のプロセスしか展開できず、相互浸透作用には至らないであろう。そして、NSと患者の認識のずれはこうした一方通行のプロセスから生じるのではないかと考える。

VII. 結論

I氏の看護介入を分析した結果、以下のことが明らかになった。

- 1、共同目標達成のためには、相互浸透行為が行われることが不可欠である。
- 2、相互浸透行為を行うためには、患者の知覚を正確に捉えることが必要である。
- 3、患者の知覚を正確に捉えるためには、十分なコミュニケーション、フィードバックが不可欠である。
- 4、リハビリに対して、患者とNSでずれがあつたのは、リハビリに対する「知覚」が患者とNSで違っていたためである。
- 5、目標の持ち方で患者と看護師にずれがあつたのは、リハビリに対する「知覚」が違っていたためである。

終わりに

今回、キングを用いて看護場面を分析したが、看護展開において、目標に対するケアが有効でなかつた理由や、自分の患者さんの捉え方の傾向が明らかになった。

リハビリは、整形外科において大変重要なものであり、回復のために必要不可欠であるが、それは看護者が感じている認識であつて、患者さんは必ずしもそうではないという事を改めて実感した。

また、なぜリハビリをしたくないのだろうと考えたとき、いつもならすぐに答えを出そうとしていたが、今回の事例を通し、患者さんを全人的に捉えて「知覚」していくことの重要性を知ることができた。患者さんを深く「知覚」するためにも、もっとコミュニケーションを図り、よりよい看護につなげていきたいと思う。

参考文献

- (1) I.M.King (杉森みど里訳): キング看護理論. 医学書院
- (2) 片山ゆかりら: 整形外科看護. 2005年10巻12号. メディカ出版
- (3) 渡邊俊之: リハビリテーション患者の心理とケア. 医学書院

プロセスレコード

患者の言動	私が感じたこと	私の言動	分析
<p><場面①> ①NSさんたちを見ていると、あんなふうには掛けるようになりたいたって思うね。もともとシヤキキと掛って生活していたから・・・。こんが腹たきりなんて考えもしなかつた。(苦笑している。)</p> <p>②あんな長い靴になるんではしょうけど、いやね、自宅に帰って杖でもいい、手すりつたいでもいいから掛けるようになりたいたいですよ。</p> <p>③そうね、大きな目標はそこですね。はあ・・・そこまでいやくの、すべん先は長いでしょうね・・・。</p> <p>④ああ、そうやね、いきなり遊学で考えてしまうと気づかりあせってうまくいきかんやろうね、少しずつ考えていくほうが、気持ちも落ち着くやろうね。(少し笑顔が見られる。)</p> <p>⑤そうですわね、私の知識ばかりじゃなくNSさんの知恵も貸してもらおうかね、宜しくお願ひします。</p>	<p>②受傷してやばりショックを受けているんだな。 ⑤後には旅行したいと、しっかり考えているな。 ⑧ためめもついているな、目標はあるけど、経過が長いから、十分に見通しがたっていないのだからか。 ⑩少し表情が明るくなった気がする。大きな目標だと漠然と向かうが、それに決まれば考えやすくなるかもしれない。 ⑭したいけど、痛くてやる気にならないというジレンマがあるのかな？ ⑰ジレンマから焦りもでてきているようだね。 ⑲痛みが取れれば、リハビリしやすくなるんじゃないか？ ⑳一番の原因は痛みであるなら、それを解決できれば他の問題解決になりそうだし。 ㉑評価もわかりやすくなるほうがいいだろう。</p>	<p>③そうですね、急に怪我をして入院して、ベッドの上の生活になるなんて、想像つかないですね。 ④では、この入院の大きなゴールは、最低でも杖やつたい歩きで歩けるようになって、ご自宅に遊学することと考えていらっしゃいますか？ ⑧そうですね、まだベッドで過ごしていかねばならない期間がありますので、この目標は長い目でみて、大きな目標として考えていきましょう。Iさんは、考え、今この目標に対してできることは、この目標に対する細か目標と、その計画を考え、実際にやっていく事ではないかと思うのですが、どう思われますか？ ⑩そのために、いまからその細か目標と計画を決めていきましょう。Iさんは、考え、今この目標に対してできることは、この目標に対する細か目標と、その計画を考え、実際にやっていく事ではないかと思うのですが、どう思われますか？ ⑫その後、それに対する解決方法を考えます。私の知っていること、情報は何でもお伝えしますので、お話ししながら考えていきましょうか？ ⑭リハビリについてですか？どのように悩んでおられますか？ ⑯リハビリの大切さはわかっているのに、痛みがあったら自分からなかなかなややる気が起きないという事ですか？ ⑰そうですね、では、リハビリしたい気持ちはあるけど、痛みでやる気がなくなってしまう、その上「しなくちやいけな」と焦ってしまうという事ですね。 ⑱わかりました。今のお話ですと、痛みが一番リハビリの妨げになっているように感じました。Iさんはどうお考えですか？ ㉑そこで痛みについてですが、痛みを軽くできればリハビリしやすくなると思いますか？ ㉒そうですね、では目標として痛みを軽くするという目標を作りませんか？ ㉓では、痛みに対しては、「痛みが現在よりも軽減する」という目標にしましょうか？ ㉔今の段階を数字で表して、来週にはその数字より軽くなること为目标にしてはどうでしょうか。21：ではこの目標を設定します。具体的な方法については痛みの事が中心なので、先生に相談して情報を聞き、Iさんに伝えていっていきましょう。 ㉕そうですね、足の筋肉が落ちてしまうことが心配なんですね。 ㉖リハビリの回数が増えれば、足の筋肉は落ちていくようになりますか？ ㉗ご自分でできる方法があれば、リハビリの回数を今より増やせようと感じますか？ ㉘そうですね、1日に何度もリハビリのPTやNSのリハビリに来るのは、現実には難しいことかもしれません。では、タオルなど道具などを使って自分でできる方法があれば、できそうに思われますか？ ㉙では、リハビリの目標を決めてみましょう。リハビリの回数(リハビリを行う機会)が増えることで、筋力低下を防ぐようように考えてみてはダメですか？今は1日1回のリハビリだったのを、目標は「筋力低下防止のため、1日3回リハビリを行うこと」ができるようにしていきましょう。来週まで行ってみてどのようになり返るとよいでしょう。 ㉚わかりました。では追加で「ひとりでも右足を浮かせることができる」としていきましょうか？この目標で、来週までがんばっていきましょう。方法としては、まずリハの先生と話し、具体的なリハビリのやり方を聞いていきますね。</p>	<p>患者はもともと自立した生活をしてきたという自己概念がある。しかし、受傷によってそれが奪われたと知覚している。NSはそう知覚していることを受容している。患者は長期入院になりそうという嫌な未来があるが、今後の希望・目標を持っている。進捗の遅さまで、手段の探索をしようとしていない。それに対しNSは整理の方法を提案し同意を得ている。患者は知恵を貸して・・・とNSのことを手助けしてくれようとして知覚している。NSはそう感じてもらったことを知覚し、共同目標を立案することを提案し、相互浸透行為に移行しようとしている。</p> <p>場面② 患者はリハビリが自分にとっても重要なものであると知覚している。また、疼痛がその障害となっていることも捉えている。NSは患者の言葉を繰り返して、患者がどのように知覚しているのかを患者に確認している。患者は疼痛が一番の障害だと知覚している。NSは知覚を捉え、その疼痛を解決するための方法について医師に相談するという手段の探索を行おうとしている。</p> <p>場面③ 患者は回復の障害となっている「リハビリの遅延」を心配している。それに對する手段の探索をしようとしてNSに投げかけている。それに對し、NSは患者の力を借りたりリハビリは困難と決め付けている。また患者が遠慮がちに話していること、患者がもともと遠慮がちなこと、患者の存在を言葉にしている。患者は他者の存在を言葉にききそうであるという手段への探索を表現しているが、NSはそれを知覚していない。</p>
<p><場面②>リハビリ・痛みについて ①私はいまリハビリについて悩んでおるとよ。(足元を見ている。)</p> <p>②私には掛けるようになりたいたいから、リハビリは大事でおもつとる。でも今ベッドの上でリハビリしてもらえないから、一日1回だけしよう。後は自分でしようしようって言われるけど、痛くて自分からなかなかなしよと思えないの。</p> <p>③そうですね、自分からしようと思っても布団をめぐってため息をついただけなんよ。そして、「リハビリせなかん」ってあせるのね。</p> <p>④そうですね、はかちやいけるけど、できないりって感じやね。</p> <p>⑤そうですね、痛みが一番の障害かもしれん。</p> <p>⑥痛くなければ、リハビリも進もうやろね、できる回数が増える気がする。</p> <p>⑦そうですね、痛みがあるのは仕方ないけど、軽くなってくれればとありがたい。</p> <p>⑧そうすると、来週比べやすいね。</p>	<p>②心配そうな表情をしている。筋力低下が心配なのか。 ⑤ご自分でリハビリをしたという気持ちがあるんだな。 ⑦今は他動運動のリハビリが中心だから、なおさらひとりでするのは難しい事と感ずるのかな。でも、PTやNSが何回も動員してリハビリするのは難しいだろう。道具を使って自主トレを手助けする方法はどうだろうか？ ⑧方法が具体的に考えられる。まず本人のできそうなるころで設定してみよう。</p>	<p>③そうですね、急に怪我をして入院して、ベッドの上の生活になるなんて、想像つかないですね。 ④では、この入院の大きなゴールは、最低でも杖やつたい歩きで歩けるようになって、ご自宅に遊学することと考えていらっしゃいますか？ ⑧そうですね、まだベッドで過ごしていかねばならない期間がありますので、この目標は長い目でみて、大きな目標として考えていきましょう。Iさんは、考え、今この目標に対してできることは、この目標に対する細か目標と、その計画を考え、実際にやっていく事ではないかと思うのですが、どう思われますか？ ⑩そのために、いまからその細か目標と計画を決めていきましょう。Iさんは、考え、今この目標に対してできることは、この目標に対する細か目標と、その計画を考え、実際にやっていく事ではないかと思うのですが、どう思われますか？ ⑫その後、それに対する解決方法を考えます。私の知っていること、情報は何でもお伝えしますので、お話ししながら考えていきましょうか？ ⑭リハビリについてですか？どのように悩んでおられますか？ ⑯リハビリの大切さはわかっているのに、痛みがあったら自分からなかなかなややる気が起きないという事ですか？ ⑰そうですね、では、リハビリしたい気持ちはあるけど、痛みでやる気がなくなってしまう、その上「しなくちやいけな」と焦ってしまうという事ですね。 ⑱わかりました。今のお話ですと、痛みが一番リハビリの妨げになっているように感じました。Iさんはどうお考えですか？ ㉑そこで痛みについてですが、痛みを軽くできればリハビリしやすくなると思いますか？ ㉒そうですね、では目標として痛みを軽くするという目標を作りませんか？ ㉓では、痛みに対しては、「痛みが現在よりも軽減する」という目標にしましょうか？ ㉔今の段階を数字で表して、来週にはその数字より軽くなること为目标にしてはどうでしょうか。21：ではこの目標を設定します。具体的な方法については痛みの事が中心なので、先生に相談して情報を聞き、Iさんに伝えていっていきましょう。 ㉕そうですね、足の筋肉が落ちてしまうことが心配なんですね。 ㉖リハビリの回数が増えれば、足の筋肉は落ちていくようになりますか？ ㉗ご自分でできる方法があれば、リハビリの回数を今より増やせようと感じますか？ ㉘そうですね、1日に何度もリハビリのPTやNSのリハビリに来るのは、現実には難しいことかもしれません。では、タオルなど道具などを使って自分でできる方法があれば、できそうに思われますか？ ㉙では、リハビリの目標を決めてみましょう。リハビリの回数(リハビリを行う機会)が増えることで、筋力低下を防ぐようように考えてみてはダメですか？今は1日1回のリハビリだったのを、目標は「筋力低下防止のため、1日3回リハビリを行うこと」ができるようにしていきましょう。来週まで行ってみてどのようになり返るとよいでしょう。 ㉚わかりました。では追加で「ひとりでも右足を浮かせることができる」としていきましょうか？この目標で、来週までがんばっていきましょう。方法としては、まずリハの先生と話し、具体的なリハビリのやり方を聞いていきますね。</p>	<p>患者はもともと自立した生活をしてきたという自己概念がある。しかし、受傷によってそれが奪われたと知覚している。NSはそう知覚していることを受容している。患者は長期入院になりそうという嫌な未来があるが、今後の希望・目標を持っている。進捗の遅さまで、手段の探索をしようとしていない。それに対しNSは整理の方法を提案し同意を得ている。患者は知恵を貸して・・・とNSのことを手助けしてくれようとして知覚している。NSはそう感じてもらったことを知覚し、共同目標を立案することを提案し、相互浸透行為に移行しようとしている。</p> <p>場面② 患者はリハビリが自分にとっても重要なものであると知覚している。また、疼痛がその障害となっていることも捉えている。NSは患者の言葉を繰り返して、患者がどのように知覚しているのかを患者に確認している。患者は疼痛が一番の障害だと知覚している。NSは知覚を捉え、その疼痛を解決するための方法について医師に相談するという手段の探索を行おうとしている。</p> <p>場面③ 患者は回復の障害となっている「リハビリの遅延」を心配している。それに對する手段の探索をしようとしてNSに投げかけている。それに對し、NSは患者の力を借りたりリハビリは困難と決め付けている。また患者が遠慮がちに話していること、患者がもともと遠慮がちなこと、患者の存在を言葉にしている。患者は他者の存在を言葉にききそうであるという手段への探索を表現しているが、NSはそれを知覚していない。</p>